

天正十年代の東国情勢をめぐる一考察

——下野皆川氏を中心に——

高橋 博

はじめに

豊臣政権期の政治史を考える上で、秀吉が関東・奥羽を支配下におさめていく政治過程を、惣無事Ⅱ平和の論理に基づくものであるとし、従来の強権的軍事制圧的な政権像にメスを入れた藤木久志氏の仕事は、現在もお学界の定説として光彩を放っている。藤木氏の「関東・奥羽国惣無事令」論をおさめた名著『豊臣平和令と戦国社会』⁽¹⁾については三鬼清一郎氏の書評⁽²⁾を皮切りに、様々な角度から批判が試みられてきたことはいうまでもない⁽³⁾。また、近年開催されたシンポジウム「奥羽——一揆・仕置——」においては、中小領主に視点を据えた「奥羽仕置」までの政治動向が明らかにされるとともに、戦国期と豊臣政権期の連続・不連続面を具象化する手がかりとして、改めて「関東・奥羽国惣無事」令の奥羽地方に与えた意義が論じられている⁽⁴⁾。

さて本稿では右の研究状況を踏まえ、中近世移行期における北関東諸領主（主に下野）の動向を中心に天正十八年（一五九〇）の所謂「東国仕置」⁽⁵⁾を画期とした、豊臣政権による大名統合のあり方を検討していくのが課題である。特に小田原陣で後北条方として一旦は改易され、代っ

て関東に入部した徳川家康の附庸大名として存続を許された皆川広照（下野都賀郡皆川城主）に着目しそこに至るまでの歴史的要因を捉えることが、現行の「関東・奥羽国惣無事令」論の一断面として、政治史的に位置づけられないかを試みる。従来、豊臣政権の対関東政策の研究は全国統一の最終目標たる対後北条氏政策に重きがおかれ、本稿でとりあげる北関東の動向に関しては、多くは後北条氏への服属過程として扱われ、地域的特性・独自性が主張されることは少なかった⁽⁶⁾。その克服のためにも、当該期の一次史料が残存する皆川氏は格好の素材として、当地域における大名の平和Ⅱ惣無事令の史的意義の解明に有用たりえよう⁽⁷⁾。

一 皆川広照の投降と豊臣秀吉の対応

天正十八年四月、小田原城を脱走した皆川広照は豊臣軍へ投降し、これを許した秀吉は、諸大名へ広照の助命を通達した。次の史料はそのうち、真田氏（信濃上田城主）に宛てた秀吉の朱印状である。

（封紙ウハ書）

（昌幸）

「真田安房守とのへ

同 源三郎とのへ^(信幸)

去四日書状、今日十一、於小田原面到来、披見候、仍此表事、先書二如被仰遣候、山中城専ニ相拵、丈夫ニ、令覚悟人数四五千人置候処去月廿九日中納言ニ被仰付候へハ、責崩悉討捕之、則致付入、小田原二町三町之間ニ取巻、堀を堀、堀柵を相付、二重三重ニ取巻、所卒番所・陣屋無透間町作ニ被仰付候、海上之儀者、警固船数千艘浮置之、誠鳥之通も無之付而、以外城中無正体、去八日夜も下野国皆川山城守侍以下百余引具走入、命を相助候様にと御侘言申上候、これハ先年御馬・太刀を者被納候者之儀候間、無是非被成御助候、即家康へ被遣之候、此以後ハ縦北条劄候て持来候共、一人も御助有ましきと被思食候、関東八州之物主共不残相籠候間、小田原一城にて関東一篇ニ被討果計候、落去雖不可有程候、長陣なされ、城内之奴原悉干殺ニ被仰付、出羽・奥州日の本果迄も被相改、御仕置等堅可被仰付候、就中其表事、^(上杉)景勝・利家令相談、無由断可相動事肝用候、^(三成)尚石田治部少輔可申候也、^(天正十八年)卯月十一日

^(豊臣秀吉)
(朱印)

真田安房守とのへ

同 源三郎とのへ⁽⁸⁾

(傍線筆者)

右史料(傍線部)にみられるごとく、秀吉は助命理由として、皆川氏が「先年御馬・太刀を者被納候者」であるからとし、その身柄を徳川家康へ預けた。この文言は『群馬県史』によれば、「秀吉は広照が先年馬・太刀を送つてあいさつしたことを認め、助命して家康に預けるという処

置をとつた⁽⁹⁾」と記され、皆川氏が献上儀礼を媒介として豊臣政権と結びつけていたことが、広照助命の直接の要因と解されている。

しかし、この皆川氏助命理由の文言「先年御馬・太刀を者被納候者之儀」が、果して『群馬県史』の言うごとく馬・太刀を「納」めた献上したことを指すのかは疑問が残る。というのも、これより約一ヶ月後の秀吉朱印状をみると、鉢形城(武蔵)攻城における豊臣軍動員について、秀吉は次のように述べているからである。

急度被仰遣候、鉢形城^(上杉景勝)越後宰相中将、加賀宰相^(前田利家)両人可取巻由被仰出候、然者此方ヨリ相越候人数、其取巻刻ハ、両人之人数与一ツニ成、陣取以下堅申付ニおるて、此方被遣人数、又ハ佐竹、結城、其外八ヶ国之内諸侍、御太刀をもおさめ候者共召連何之城成とも、不相渡所於有之者、取巻、いつれの道にも可討果儀、切々被仰遣候処ニ、こやゝのはしろ共、貳万余りの人数にて請取候事、不能分別候事、

一、大軍を被召連、八か国之内四五ヶ国持候北条を、日本五十ヶ国之者として、可劄首儀ハ勿論にて候か、其上⁽²⁾関白被出御馬候てハ、はね能しめ能狂歌迄無之候てハ、御馬をハ被治間敷候条、其分別可然候事、^(後略)⁽¹⁰⁾

(傍線筆者)

つまり秀吉は傍線部①においては、佐竹・結城氏ら関東の諸大名について、豊臣の軍役動員に応じるだけの臣従関係が結ばれている証として、「御太刀をもおさめ候者」であると評し、傍線部②では、秀吉自らが出馬した限り、陣中で遊興(能・狂言)をする余裕がなくては、「御馬をハ

被治間敷候」と述べているのである。この場合、秀吉が客観的に諸大名を評価している傍線部①の「おさめ」の方が冒頭の史料に掲げた皆川氏の助命の根拠の文言である「先年御馬・太刀を者被納候者之儀」の「納」に対応できるといえる。⁽¹¹⁾

すなわち、秀吉が公開した助命理由は、皆川氏が馬・太刀を「送つてあいさつをする」ような具体的行動に由来するものではなく、東国仕置以前より兵馬を「納」めていたことを評価したからと言えよう。当時の武家社会において、文書中で馬・太刀献上を記す際は、「進」の文字使用が慣例であった。たとえば、同年八月二日付伊達政宗宛浅野長継書状中、長継は、東国仕置で帰服した白川義親が秀吉に「御馬進上」を行った旨を政宗に報じている⁽¹²⁾、天正十六年（一五八八）七月の毛利輝元上洛時、聚楽第での太刀・馬代献上の際も同様であった⁽¹³⁾。また、天正十一年（一五八三）、上杉景勝が秀吉に好を通じた際、秀吉の奏者増田長盛は、「御太刀一腰、馬一疋鶴毛被進候⁽¹⁴⁾」と献上に答えていたように、太刀・馬贈答では、送る側送られる側とも「進」を用いている。一方ここで問題とされている「納⁽¹⁵⁾」については、「納馬（うまをおさむる）」⁽¹⁶⁾「Tachiuo vosamuru（太刀を納むる）」という、軍事行動の始まりを示す「出馬」の対極におかれた馬・太刀「納」めとして、その終結を意味していたのであった。⁽¹⁶⁾これらの諸事実は、豊臣政権が皆川氏を天正十八年以前のある時点、すなわち「先年⁽¹⁷⁾」から、「御馬・太刀を者被納候者」として認め、東国仕置を行うに当たっても、豊臣軍に敵対する武力団体として認識していたとはいえず、皆川氏が少なくとも天正十年代（一五八二〜八九）後北条領国下に組こまれた北関東周辺の諸領主とは一線を画する存在であったこと

とを示唆している。皆川氏は豊臣政権により知行安堵を受けたわけではないし、逆に豊臣政権が「誅伐」の対象たる後北条氏とともに小田原に籠城し、攻戦の姿勢を示した皆川氏を、全国統一の基調である「惣無事」の論理で個別大名権の惣安堵に帰結させたとはい難い。なれば、歴史的结果として皆川氏の動向を象徴した「御馬・太刀を者被納候者之儀」という状況が統一政権との間のいかなる過程をもつて形成されたのか、またそのような文言を公開した秀吉の政治意図はいかなるものであったのか、これらを追求すれば、皆川氏にとって兵馬を「納」めることと私戦禁止令を受容することが果たして「関東・奥両国惣無事令」の本質をどれだけ捉えたものであるか明らかにできるだろう。そのためには、東国仕置まで皆川氏がたどってきた歩みを、統一権力との関係と連関させながら論証していく作業が必要であるが、その端緒は、織田政権末期までさかのぼることが出来る。⁽¹⁸⁾

二 織田政権下における皆川氏の動向

皆川氏の出自は「皆川系図」⁽¹⁹⁾によれば、藤原秀郷を祖とする地方豪族として、代々下野長沼荘を本貫としていたが、十五世紀後半、氏秀の代から皆川荘へ移り、それまでの長沼姓を皆川と改め、四代経た後、広照の代となった。⁽²⁰⁾

① 織田信長との関係

『譜牒余録』によると、皆川氏は天正九年（一五八一）秋、信長に馬献

上を行つており、織田政権の最末期に接触を持ったことが窺われる。次の史料は、この時信長が皆川（長沼）氏に与えた朱印状である。

馬一疋到来候、誠遠達之懇志、悦喜無也候、殊更韋毛別而相叶心候、馬形乘以来無比類、彼は秘蔵不斜候、仍摺百端・虎革五枚・紅緒五十結相送之候、悦儀計候、謹言、

(天正九年)
十月廿九日

(織田)
信長（朱印）

(広照)
長沼山城守殿⁽²²⁾

室町時代、馬献上は鷹献上と共に、武家領主が足利將軍家から守護・探題職等の支配権を公認された際の答礼として慣例化していたが、戦国の動乱を経、このやりとりは將軍家に対してのみならず、領主間のやりとりとして、より上級の領主権力と結びつくためのねらいをもった、極めて政治的色彩を帯びたものとなつてゆく。皆川氏の馬献上も同様、織田政権より領国支配権を公認されるための意図で行われ、右の信長朱印状獲得は、自己の領国内における権威を高める点でも大きな意味があつた。⁽²⁴⁾『寛政重修諸家譜』ではこのことについて、「のち書をあたへらる」と⁽²⁵⁾と広照の代の政治的画期として記され、それは奥羽の領主層まで含めた、東国全体の歴史的趨勢の中にあつた。

② 徳川家康との関係

皆川氏を織田政権と結びつけるための橋渡しの役割を果たしたのが、信長の同盟者である徳川家康であり、皆川氏との関係は馬献上の前年の天正八年（一五八〇）より始まつていた。『寛永諸家系図伝』によれば、この年、皆川氏は家康の家臣中川忠保を奏者として徳川氏に通じ、その幕

下に属し、「君臣の礼」をとつていたことが記されている。⁽²⁶⁾天正十年（一五八二）、家康が甲州征伐の恩賞として駿河一国を得、その御礼言上のため安土城へ出仕するに及び、皆川氏はこれに随従し、信長拜謁を果たしたことが『寛政重修諸家譜』にみえる。⁽²⁷⁾

③ 織田政権末期の東国「取次」機構

天正九年に行われた信長への馬献上において、皆川領国からの使節派遣は、広照の伯父で永年紀伊根来寺で修行し、上方の政治事情に通じていた智積院の先導によつて行われ、信長へ取り次いだのは、側近の堀秀政であつた。

覚

下つけの国ミな川と申もの、いまた御礼不申上候、冥加の為ニ御座候条、御馬三、進上申度候由候て、ひき上申候、その内くろあしけの御馬、関東においてすぐれたるはや道の由申候、残二疋之儀ハよくも御座なく候へ共、はしめて進上仕候二一疋ハあまり物すくなニ御座候とて、右分ニ御座候、此御使ハミな川^(伯父)おち坊主智しやく院と申候、廿ヶ年はかり以前よりねころ^(根来)へかくもんに罷越在候を、去年わさとよひくたし、只今さし上申候、然ハこもと一円無案内ニ御座候ニ付而、前坊を以申候、以上、⁽²⁸⁾

右史料は、皆川氏の使節を迎える際認めたものと推定されている堀秀政の覚案文である。これによると皆川氏は信長の好みになうべく、「関東においてすぐれたるはや道」である「くろあしけの御馬」を含めた馬三匹を献上し、使者智積院は、二十年間紀伊根来寺に「かくもん」（川学

問)のため居住していたのを、皆川氏が「去年」(天正八年)下野に呼び戻し、改めて信長のもとへ派遣した人物であった。このような、中央情勢に疎い遠国諸大名が、自領にゆかりのある人物を起用して統一政権との接触を計っていたことは、伊達・南部氏等の諸事例が知られており、皆川氏も例外ではなかった。堀秀政は信長朱印状と同日付の副状で、関東の名馬が披露された旨を皆川氏に宛て、委細は智積院の帰還をもって、皆川領国内へ伝達されたのであった。

また、智積院一行帰還における通行の安全を担当したのは、翌天正十年上野国主として、東国の「取次」を任命される滝川一益であった。皆川氏の馬献上に応える信長朱印状・堀秀政副状と同日の天正九年十月二十九日付で、滝川一益宛てに智積院を「常陸蟻川」まで送り届けるため、相模の後北条氏の承諾を得るべき旨を命じた信長朱印状がある。その朱印状中「相州へも能々可申越候」と記されているのは、途中に通る三河・遠江・駿河までは盟友徳川家康の勢力下であり、そこまでは信長の權威の及ぶ交通路であるからで、家康自身、同年十一月十二日付で皆川氏に宛てた書状において智積院帰還について触れ、「東海道公儀之上、無異儀帰路候」と通行の安全性を明確にしている。

このように、馬献上を通じて従属の意を示した皆川氏に対して、織田政権は使者の通行を保証し「公儀」政権としての威光を示し、家康もその体制内に組み入れられていたのであった。まもなく信長が本能寺の変で倒れ、東国織田分国が崩れる天正十年の政治情勢下、皆川氏は欠国となった甲斐切り取りを目指す徳川家康に従軍、織田政権崩壊後の家康の權威に期待を寄せていた。

三 後北条・徳川同盟と「関東惣無事」体制

しかし、天正十年十月、後北条・徳川間に和睦が成立し、上野は後北条氏の、甲斐・信濃は徳川氏のものといった、当事者の自力・実力次第による国単位の領土分割が協定されると、皆川氏に与えた政治的影響は大きなものがあつた。

① 後北条氏の上野支配と皆川氏

右の国分け協定にもとづく、後北条氏の上野侵攻が本格化すると、由良国繁(上野金山城主)、長尾顕長(上野館林城主)ら在地の旧族は居城を明け渡され、後北条氏の直轄領化を余儀なくされる。

《史料1》

十六日之状、敏二可及返答候得共、從十二三自身普請候故、取乱遅々候、一上宮之儀、得其意候、一館林之注進、氏直へ被越候哉、此度由良・長尾身不参陣候、依之奏者二糺明候処二、安房守有佗言申旨、由良者城破却、女房共二在府二落着、長新者、惑説故、身構非逆意由申間、只今糺明半二、以文成共、以武成共、静謐安候、恐々謹言、

(天正十二年)
二月十九日
(北条氏規)
美濃守殿

(北条)
氏政(花押影)

(傍線筆者)

《史料1》は、由良・長尾両者が後北条氏の軍役に応じなかった(傍線①)ため、由良氏は居城を「破却」、国繁夫妻ともども小田原「在府」

が強制され、長尾氏もそれに連なる嫌疑がかけられている(以上傍線②)ことを、北条氏政が弟氏規(伊豆韭山城主)へ報じたものである。後北条氏が要請していた「参陣」とは、下野佐野城(城主佐野宗綱)攻めのことであった。そして同時に佐野領に隣接する皆川領では、後北条氏の軍事的脅威への対応に迫られることとなった。

皆川氏のとった対応とは、天正十年、徳川氏の甲斐切り取りの際「新府の陣」をつとめるなど、忠誠を示していた家康との関係に期待することであった。

《史料2》

急度令啓入候、改年二者未申承候、背本意候、仍而御分国中御静謐之由玆重候、然者関東惣無事于今未落居二候、被引詰様二頼存候、殊二由信・長新進退之儀、家康御威光以一度被召返儀、両地へ各拙者無由断咤言申候、関東之覚与申、此所御念入候様二旁々御取成極候、^④切ハ筑州御間趣、於此方者、種々申来候、無御心元存候、将亦雖乏候、為御音信白鳥一ツ、進之候、御一儀迄候、委細之所彼口迄申含候条、令略候、恐々謹言、

(皆川山城守)
皆川

(天正十二年)
三月十二日
(本多正信)
本弥
御宿所⁽⁴⁰⁾

広照(花押)

(傍線筆者)

《史料2》は、皆川広照が徳川家康の側近本多正信(弥八郎)に宛てた書状であり、《史料1》同様天正十二年(一五八四)のものと推定され

ているが、この点については後述したい。広照はまず傍線①で、関東の争乱が終結していないことを挙げ、その解決を家康に要望している。具体的には傍線②で、《史料1》中記されているごとく、一ヶ月前(天正十二年二月)に後北条氏の軍事的圧力に屈した由良・長尾両者の「進退」を、家康の「御威光」をもって元の状況に戻すべく、皆川氏自身が両者へ「咤言」すなわち説得を行い、傍線③「関東之覚」として、両者の取りなしを家康に期待していたのであった。

②《史料2》の年代比定の再検討

従来《史料2》については、天正十六年(一五八八)、すなわち豊臣惣無事令発令以降とみる「枋木県史」の見解が有力であり、現行の惣無事令論は同書に拠っている。例えば藤木久志氏は、著書「豊臣平和令と戦国社会」(第一章第三節「関東奥両国惣無事令の成立」)の中で《史料2》について触れ、皆川氏がこれを発した政治社会的背景として、天正十五年(一五八七)暮に家康を主体とした惣無事令執行体制が決定されたこと、後北条氏は豊臣政権の「外圧」に対抗するために領国防備体制を強化しつつあったこと、そして「この関東の新たな緊張のもと、十六年三月、下野の皆川広照は『関東惣無事、于今未落居候、被引詰様二頼存候』と徳川方に報じ、家康の力量による惣無事の達成に期待を寄せていた」と、《史料2》の意義として評価しているが、これら通説は修正される必要がある。天正十六年という点、《史料2》で皆川氏が問題としていた「由信・長新進退の儀」という状況が、既に両者が本實地を追われ、しかも替地として与えられた所領にまで、後北条一族の「物主」としての

権力が及んでいる時期であり、家康「御威光」をもって、由良・長尾両者を「召返」すことを期待するのは非現実的であろう。《史料2》中の「進退」とは《史料1》中の「由良・長尾不参陣」のことを、後北条氏に「糺明」されることで、両者が窮していた状況（城破却、小田原在府）であったと考えられる。

また、《史料2》が天正十二年のものとすれば、これに応答した家康側の史料として、次の《史料3》が挙げられる。

《史料3》

遠境之處、芳墨殊為御音信、黒鞭^(縣)之馬被著上給候、乗心・馬形等勝候間、別而自愛不斜儀候、真上洛之節候間、祝着無申計候、將又其表惣無事、由良・長尾儀付而、先度中川市助差越候キ、定可為参着候間、不能重説候、次去九日及合戦、始池田父子、森庄三・木下勘解由・同助左衛門、大將之者共悉其外一万余討取候、羽柴儀、使者如見聞者、地利ニ引入在之候間、一途遅延之儀候、乍去此度討留無異儀可令上洛候、於様子者可御心安候、尚使者口上相合候、恐々謹言、

(天正十二年
卯月廿一日)

皆川山城守殿

(徳川)
家康(花押影)

(傍線筆者)

一読してわかるように、《史料3》は天正十二年四月、当時尾張で秀吉と交戦中であつた徳川家康が、そのあらましを皆川広照に報じたものであり、傍線部の文言は、《史料2》で皆川氏が「関東惣無事」の「落居」を家康へ要請したことに対する応答を示すものと考えられ、家康はその

「御威光」をもって、家臣中川忠保を後北条領内へ派遣し、由良・長尾両者の「召返」しにつとめていたのであつた。そして、《史料2》傍線④において、皆川広照が徳川家康と「筑州」との「御間趣」を「無御心元存候」と心配しているのも、秀吉（筑州・筑前守）との交戦に突入しようとしている家康の立場を氣遣つた天正十二年三月時点のものに他ならない。逆に《史料2》傍線④の「筑州御間趣」が、旧説のごとく天正十六年中の秀吉との關係を指していたものだとすると、当時の秀吉が「筑州」と文書中記されることはまずあり得ないし、とすれば、「筑州」をさす人物としては、前田利家ということになるが、秀吉の死後ならともかく、天正十六年の政治状況で、家康・利家の「御間趣」を、皆川氏が「御心元」なく憂える根拠は見当らない。⁽⁴⁵⁾

このように、《史料2》は天正十二年のものとみるべきであり、豊臣・徳川間が対立している情勢下で、皆川氏によって発せられたという事実とは、皆川氏の期待している「関東惣無事」とは、後年豊臣惣無事令により達成されるものとは異なり、中央権力の介入しない、関東の地域内で完結する「惣無事」であつたと考えられる。それは上位権力者として家康を設定し、家康「御威光」に頼りつつ、後北条氏との共存を成立させる目的によるものであるが、ただ家康と關係が深い皆川広照個人が主張していたわけではなかつた。《史料2》で、皆川氏が由良・長尾両者を家康が取り成すことを「関東之覚」と述べている如く、「関東惣無事」の達成は、北関東中小領主層の共通した念願であつたと考えられないだろうか。⁽⁴⁷⁾

③家康の「御威光」と中小領主

それでは、「関東惣無事」を達成する存在として期待されていた、徳川家康の「御威光」とは一体どのようなものであったか、次の史料により検討してみよう。

急度令啓候、抑今度各申合候処、上方申事在之付而、三介殿自御兄

弟、当表对阵之儀、令無事、諸事御異見等之儀、我々江頼入候旨、

度々御理之条、任其儀、氏直与和与之事候、其方如存知之、我々年

来信長預御恩儀、不浅候間、無異儀者、落着候、其付而、信長如御

在世之時候、各惣無事尤候由、氏直へ申理候間、晴朝へ御諫言第一

候、委細幡龍可為口上候、恐々謹言、

十月廿八日

(勝後)
水谷伊勢守殿

(徳川家康)
御名乗御書御判在

右史料は家康が常陸の豪族水谷氏に宛てた天正十年のものであり、後北条氏との和睦を報じた内容は、信長死後の東国織田分国をめぐる北条・徳川間の紛争終結を示している。これによると家康は和睦について信長の遺児(三介殿御兄第)「次男信雄、三男信孝」に頼まれ、信長「御在世」のごとく、「各惣無事」を関東に再現すべきことを述べている。家康は結城氏の動きにも目を光らせ、水谷氏をもって「御諫言」(「紛争停止の命」)を行使していたのであった。

すなわち、織田東国分国の崩壊過程で、水谷氏をはじめとした関東中小領主に家康の掲げたスローガンは、信長の「御恩儀」を忘れず、生前の「惣無事」たる秩序維持を計ることにあった。具体的には領主間紛争

を停止し、関東の自由な通行を保証することにあった。⁽⁵⁰⁾ 中小領主層にとってそれらの実現が「氏直へ申理」を行うことではじめて可能となる徳川家康の政治的軍事的実力によるものとすれば、《史料2》のごとく天正十二年に至って、皆川氏が後北条氏の勢力伸張を阻止しうるにたる家康の「御威光」に期待するのは当然の成り行きであった。しかし、信長「御在世之時」のごとき姿勢で関東諸領主に臨んだ家康の政策も、当初より紛争裁定のために「御諫言」を行うほかは、より強力な執行力は持ち得なかったと考えられ、その「御威光」も後北条氏との国分協定の枠組があるかぎり、「関東惣無事」体现のための効力はなかった。⁽⁵¹⁾

④秀吉の台頭と関東

同時期関東の紛争終結を唱えたのは徳川家康だけではない。

羽柴秀吉が結城晴朝・太田資正・多賀谷重経らの関東諸領主に、彼らが天正十一年(一五八三)四月の賤ヶ嶽の戦勝を祝ったことに対してその答礼の書状を一斉に発したのは、同年七月二九日のことであった。⁽⁵²⁾ これら三通はいずれも同文であり、秀吉が信長一部将時代の天正十年高松城攻城からはじまり、その後の中央政治情勢の変動を詳細に記した内容は、織田政権の継承者として、自己の新政権としての正当性を関東諸領主に示す目的があった。また、同年十月、家康に対しても関東のことに触れた次の書状を送っている。

從甲州御帰城之由候間、以一翰申入候、仍信州御手置等丈夫被仰付候由、肝要存候、兼而又関東者無事之儀被仰調候由、被仰越候、乍去于今御遅延二候、如何様之儀二而御座候哉、最前上様御在世之御

時、何茂無御疎略方々ニ候間、早速御無事モ被仰調尤候、自然何角延引有之仁御座候者、其趣被仰越候者、御談合申、急度其御行可有之候、(中略)、恐々謹言、

羽柴筑前守

秀吉

十月廿五日

(徳川家康)

参河守殿

(53)
人々御中

右史料によると、秀吉は関東の「無事之儀」が家康によって果されることを認め、それは関東諸領主が「上様(＝信長)御在世之御時」にいずれも「無御疎略方々」であつたから、もし家康が関東の「無事」を「延引」するようなこととなつた場合、家康への協力(「御談合」)を惜しまないことを述べている。この年(天正十一)の四月、柴田勝家を滅ぼした秀吉は、信長の後継者としての圧倒的な政治的地位を築いた。だが、旧織田外交の継承面では、六月には佐々成政(越中富山城主)を越後上杉氏の「執次」⁽⁵⁴⁾として、早くも自己を全面に押し出した大名統合の動きをみせはじめた秀吉も、成政との力関係や織田信雄の存在などで、その「執次」のあり方は織田政権下の慣例をひきついでいたにすぎなかつた。⁽⁵⁵⁾

しかし秀吉にとつて、自己の諸大名「取次」体制の構築を、一方的に成政から「上様御時」⁽⁵⁶⁾の体制であると規定されるだけではなく、自ら「上様御在世之御時」⁽⁵⁷⁾を唱えることが、信長の後継者として関東諸領主に、家康に優越する上位権力者としての立場を示すねらいがあつたとするならば、後の豊臣惣無事令発令時に先行する政治的下地はこの時からその

構築がはじまつていた。それは、「上様御在世之御時」という徳目にもとづき家康を従え、且つ諸領主の「無事」を期待するもので、同時期家康が独自に信長「御在世之時」を唱えて「惣無事」を果そうとした動きとは、まだ一線を画していた。

四 豊臣惣無事令と中小領主

天正十二年まで、「関東惣無事」体制として皆川氏が保持していた自立性に転換がもたらされたのが、「関八州国家体制」⁽⁵⁸⁾を自認する後北条氏の下野進出であつた。

① 後北条氏の下野進出と皆川氏

後北条氏は天正十三年(一五八五)正月、下野佐野城を落とし、城主佐野宗綱は敗死した。これにより佐野領国は、後北条一族の北条氏忠(相模足柄城主)が佐野の名跡を継ぎ、実質的に後北条領国の支配体制に組み込まれ、以後宗綱の実弟天徳寺宝衍による佐野氏復興活動が上方で展開される。⁽⁵⁹⁾

右の動きに対して皆川氏は、同年九月五日付の上杉景勝宛の書状において、後北条氏の進攻を訴え、「早卒御越山奉念頭候」と、その来援に期待していた。しかし、翌天正十四年(一五八六)になると戦闘は本格化し、『寛政重修諸家譜』によれば、後北条氏が皆川氏を攻めた際、それを知つた家康は北条氏政に和睦を勧めたという。⁽⁶¹⁾五月中には和睦が成立していたと考えられるが、にもかかわらず再度氏政は皆川氏を攻め、皆川

氏は上杉氏の力を借りてこれを撃退した。⁽⁶²⁾ 天正十五年（一五八七）になると、再び家康の裁量により両者の講和がなされ、永禄十二年（一五六九）遠江で没した大納言中御門宣綱の息女を北条氏政の養女とし、皆川広照に嫁がせるという条件で決着がみられたのであった。⁽⁶³⁾

②「関東惣無事」体制の変質

このように、皆川・後北条間の背後には、上杉・徳川氏といった大名が救援・調停者としてそれぞれの動きをみせていた。皆川・徳川間でみれば、たとえば天正十五年の講和で家康の奏者として動いたのは中川忠保であり、織田政権期の天正八年から一貫して両者間の意志伝達を行っていることから、両者の関係の連続性を認めうる。しかし、この和睦は、家康が天正十二年までの「関東惣無事」体制の遂行を継続したものではなかった。

つまり、天正十五年になされた、皆川・後北条間の講和は、前年暮に発令された豊臣惣無事令⁽⁶⁴⁾の動きにもとづき行われたものであり、家康が豊臣政権に臣従の礼をとっていたことが前提としてあった。秀吉は天正十一年に上杉氏が臣従してからは上杉氏を、天正十四年の小牧・長久手の戦の講和以降は家康を「取次」とし、秀吉に近づく多くは関東にない人物を、関東の主立った領主のもとに派遣している。⁽⁶⁵⁾ 先述のとおり、秀吉と関東諸領主がはじめてつながりをもったのは天正十一年七月のことであった。しかし皆川氏をはじめ中小領主についてみれば、豊臣政権成立までもない天正十二年頃までの時期では、「関東惣無事」体制という、いわば関東中小領主のまとまりをめざす方向性にあり、同時期

秀吉は対家康工作に追われていたことから、関東諸領主に「信長公御時」⁽⁶⁶⁾の徳目を説くことはあっても、それは信長の後継者としての正当性を吹聴していたにすぎなかった。

③「関東・奥両国惣無事」令と皆川氏

まもなく天正十三年八月、秀吉は関白任官をとげ、六十余州の進止権の行使者として、以後の統一戦争を正当化していくと、関東への対応にも変化が生じる。藤木久志氏によると、秀吉から家康経由の惣無事令の発動時期は、家康の服属直後の天正十四年十一月のことであり、家康を介して後北条氏の服属を説得することが、関東惣無事令の最優先の課題であったという。⁽⁶⁷⁾

右の政治状況から考えて、天正十五年、皆川・後北条間に講和がなされたことも、家康の東国「取次」役としての、豊臣政権下の公的活動の一環とすることができる。秀吉は関東諸領主における家康の「御威光」を逆利用し、自己の政権機構内に位置付けることによって、その「御威光」を関白公権に吸収しようとしたのであった。⁽⁶⁸⁾ しかし家康が和睦にあつたのは婚姻政策として、自領にゆかりのある公卿を頼って皆川・後北条間の縁組を行ったように、秀吉が東国へ停戦令を受諾させるために要請した「取次」役とは、ある程度当事者（家康）の判断に任せられていたことが特徴的であり、それは家康と諸領主との個別的関係が継続することを示していた。

そして家康が執行を委ねられた豊臣惣無事令発令後から、天正十八年の東国仕置まで、皆川氏自身によるものや、皆川氏を対象とした領主間

文書が見受けられなくなることは、皆川氏が後北条氏との縁組みを契機にその自立性を失ないつつあることを示唆していた。やがて天正十七年（一五八九）十一月、豊臣・後北条間の交渉が決裂し、後北条領国内において戦時体制が固められる中、皆川氏は小田原入城を余儀なくされたのであった。⁽⁶⁹⁾

五 秀吉の東国仕置と皆川氏

天正十八年七月、後北条氏は降服し、豊臣政権による「関東仕置」（東国仕置の一環）が行われた。大きな流れとしては、改易された後北条氏に代って東海から徳川家康が入部し、周辺の諸領主に対しては、臣従の意を表した段階で「当知行」安堵がなされ、妻子上洛が命ぜられ、徳川氏については独自の仕置が許され、中小領主については検地・刀狩の実施、知行目録の給付が行われた。

①下野の状況

下野に関してみれば、小田原落城後、豊臣政権は後北条氏に属した小山・壬生・皆川・佐野・長尾各氏の支配領域のほとんどを没収した。しかしこのうち、佐野領は後年、秀吉側近の天徳寺宝術に還付されている。また、小山・壬生の旧領、それに日光領は結城秀康に加増分として与えられ、佐野領とともに徳川領国からは除外され、結果として、下野で徳川領国となったのは、小田原城から秀吉に投降して家康に預け置かれた皆川氏の皆川領と、長尾氏の足利領のみであった。

つまり下野において秀吉が家康に与えた領国は、その範囲を旧後北条領と比較してみると、小山・壬生・佐野各氏と日光山の知行分が除外されている。それらの領域は、天正十年代（一五八二～八九）に後北条氏への従属性を強めつつあったとはいえ、なお自立的な領主としての側面を有しているという性格から、惣無事令発給の時点でひとまず後北条領国の一部として凍結されていたとしても、かなり不安定な位置にあり、それゆえ関東仕置における豊臣政権による没収の対象になりやすい条件下に置かれていた。⁽⁷⁰⁾

②知行割における皆川氏の位置づけ

このような状況下、皆川氏が秀吉のもとに投降し、「先年御馬・太刀を者被納候者之儀」という理由のもと家康に預けられ、その麾下に属したことの政治的意義を考えてみよう。

まず皆川氏が下野国内の他の中小領主と異なり、徳川氏の家臣団に組みこまれたことについては、天正八年（一五八〇）から継続していた家康との関係が重要な要素を占めていた。また、家康が東国「取次」役として、大きな政治力を有していたことも重要であろう。先述のごとく、天正十五年（一五八七）家康が皆川・後北条間の和睦を仲介したことは、豊臣政権の公的活動であった。豊臣政権は関東知行割の際、皆川氏の領国を、壬生・小山氏とは区別して没収し、旧後北条領国の延長として、家康に皆川氏をつけたと考えられないだろうか。

（略）上州表之事者 佐野・新田・館林其外松井田落居候、皆川二
も出仕二仕候、此表壬生・鹿沼之事者、上総介小田原二桶菟候間、
^{（義雄）}

彼身上之行衛承届、在地の者共可致出仕之由、内々佗言候、(後略)⁽⁷¹⁾

この天正十八年(一五九〇)四月二十九日付の東義久(常陸太田城主佐竹義宣の臣)書状(宛先不明)をみると、家康を頼つて皆川氏が「出仕」を果した四月八日後、まだ小田原城に籠つていた壬生義雄(上総介・下野壬生城主)の「身上之行衛」を氣遣つた佐竹氏は、「在地之者共」(壬生領の留守居)でも「出仕」すべきことを密かに「佗言」(「説得」)を行う動きを見せたが、結局壬生氏の出仕は果せず、その所領安堵がなされることはなかった。

③知行安堵の条件

次に、降服時その理由としての「先年御馬・太刀を者被納候者之儀」の文言であるが、これは豊臣政権の仕置における知行安堵の条件を考える上でも重要であろう。知行安堵の条件については、従来小田原参陣が絶対的なものとして考えられていたが、近年の研究成果では、鷹献上を契機とするもの、⁽⁷²⁾仕置奉行の裁量に委ねられているもの⁽⁷³⁾といった新事実も指摘されている。皆川氏のように仕置時、後北条氏の軍団として小田原城に籠城しても、以前から家康を通じて、「御馬・太刀を者被納候者」といった姿勢を示していれば、それは本質を存続するために決定的な過失(改易・放逐の理由)とはならなかったのである。とすれば豊臣政権が家康に対して、小田原攻城における皆川氏の動向監察・牽制者として、かなり高度な政治能力を期待していたことも想像に難くないし、皆川氏の脱走も、単なる戦況推移の所産だけでは考えられない。皆川氏と同時期、秀吉のもとへ「走入」り、家康に預けられるという同一の経路

をたどつた北条氏勝は、後北条一族であり、攻城が深行している相模玉縄城主であることから、両者を同次元で比較することはできないが、同じ規模の国人領主として小田原城に籠り、あまつさえ皆川氏同様家康との関係が深かつた和田信業(上野和田城主)の場合はどうであつただろうか。

去月^(五)六日之状、十三日被加御披見候、仍小田原之義、弥丈夫二仕寄等被仰付候、依之、城中様、夜日及難堪、缺落之輩雖有之、於其場被加御成敗、又者追返候間、上下被為干殺を相待迄二候、昨夜和田家来の者百余、家康江相理、小屋く二火を懸走出候、雖可被成誅罰候、家康江兼而心合之由二候條、被助置候、(後略)⁽⁷⁴⁾

(傍線筆者)

右史料は、同年六月七日付の加藤清正宛て豊臣秀吉朱印状の一部である。傍線部をみると、和田氏は皆川氏と同数の主従百余を引きつれ、あらかじめ家康の了承を得た上で小田原城を「走出」し、豊臣軍へ投降したが、秀吉の許した理由が和田氏が「家康江兼而心合之由」と、家康と親しかつたからということにもかかわらず、和田氏はその御家存続のため、家康のもつ政治力に期待することはできなかった。降服して助命嘆願を行うことは、成田氏長が、秀吉の右筆山中長俊を通して、「御前之様子宜様頼入外無他事」と請願したごとく、秀吉近辺の特定人物との昵懇関係をもつて、秀吉の機嫌を取り成してもらい、身柄を保証されることはできても、多くは敗亡間近における危機感のなかでの選択であり、六月六日という、小田原落城が間もない時期に投降した和田氏も例外ではなかった。

だが、秀吉と家康との間に、皆川氏が「御太刀・馬を者被納候之儀」という信頼感があつても、皆川氏が小田原籠城を果したという事実は豊臣大名として秀吉と主従関係を結ぶことが許されず、その意味でも、「関東・奥両国惣無事」令における私戦禁止の条件は、東国仕置時にも生きていたといえよう。

④周辺諸領主の様相

皆川氏の周辺諸領主の動きはほかに如何なる政治的要因に基づくものがあつただろうか。城主宗綱が天正十三年（一五八五）正月敗死し、後北条氏の支配権が及んだ佐野領においては、宗綱の弟天徳寺宝衍が豊臣大名として旧領を回復した。結果的に独立大名として自立性を回復できたのは、秀吉側近として發揮しえた、宝衍の政治能力も影響していたであろう。⁽⁷⁾富岡新三郎（上野小泉城主）、由良国繁（上野桐生城主）は、それぞれ浅野長吉、前田利家の取り成しにより助命されるが、由良氏の実母に堪忍分（常陸牛久領）が宛てがわれたのに対して、富岡家中は離散し、一族は結城氏に仕官する。由良氏に関しては、「関東惣奉行」として仕置に大きな発言権のあつた前田利家に取り成したことが有利な結果を生むに至つた。⁽⁸⁾これら北関東の事例に限ってみても、東国仕置を経て、近世国家に組み込まれる過程は、諸大名独自の歴史的背景があつた。

むすびにかえて

以上、皆川氏を中心とした北関東の戦国・近世初期の動向を垣間みる

ことで、当該期の政治史研究の一端としての位置づけを試みた。惣無事Ⅱ平和の論理のもと、諸大名統合に当つてきた豊臣政権は、諸大名それぞれの歴史的事情に基づいた「安堵」の形態を必要とした。皆川氏は織田政権期から徳川氏の指導で中央との接触を計つていたこと、その軍事指揮下にあつたことが幸いし、東国「取次」役としての家康の政治力により小田原籠城の罪にもかかわらず、本貫の存続が可能たり得た。この意味では、皆川氏にとつての「関東・奥両国惣無事」令とは、年来の東国における徳川氏の権威のフィルターを通して達成されたとみるべきであり、それは関東知行割における位置づけ（徳川氏の付庸大名）にも反映されている。織田信長の死後、少なくとも天正十二年（一五八四）頃までの北関東には、後の豊臣政権への求心化の動きとは異なる、中小領主による北関東全体のまとまりをめざす動きⅡ「関東惣無事」体制があり、家康はその体现者であつた。この時点まで、織田政権下に構築された東国「取次」としての家康の権威は関東に生きていたといえよう。しかしその「関東惣無事」秩序も、後北条氏の「関八州国家体制」構築までの時間的に限られた秩序であり、更には、豊臣の「関東・奥両国惣無事」令が、関白政権としての秀吉の権威と強大な領主権を背景として展開されると、それまで「関東惣無事」体制内で水平的に展開された伝統家族層による一揆的秩序は「公儀」の名のもとに解体され、統一政権による知行体系の確立を見るのであつた。

〈付記〉本稿は、一九九二年一月十日、学習院大学大学院人文科学研究科（史学専攻）に提出した修士論文に若干手を加え作成したものである。

註

のである。また修士論文の前提となる報告を、一九九一年十月五・六両日開催された東北史学会・弘前大学國史研究会三五周年記念合同大会（於弘前大学人文学部）で行っている。修士論文作成でご指導いただいた高埜利彦先生と研究報告の機会を与えて下さった長谷川成一先生には深く感謝の意を申し上げます。

(1) 東京大学出版会、一九八五年。惣無事令とは、直接には天正十五年（一五八七）十二月三日付で、豊臣秀吉の発した「関東・奥両

国惣無事之儀」を主題とする直書を指しているが、豊臣政権の全国統一の特質を示す用語として使用されている。すなわち大名・領主間の領土紛争を私戦として禁じ、領土裁判権を独占する豊臣政権が紛争の平和的解決を計ろうとするもので、この惣無事Ⅱ平和の論理が統一政策の基調をなす。本稿では北関東を対象地域としている都合上、史料的な意味合いを込めて「関東・奥両国惣無事」令・「関東・奥両国惣無事令」論と表現しているが、全国的な概念として論じる際には、「惣無事令」と略すよう心がけている。

(2) 『日本史研究』二八〇、一九八五。

(3) そのほか書評として今野真氏（『歴史』六五、一九八五）、山室恭子氏（『史学雑誌』九五—一、一九八六）、酒井紀美氏（『歴史学研究』五六三、一九八七）。批判の内容は〈A〉惣無事令の権限根拠についての疑問、〈B〉惣無事令を秀吉の真意として、秀吉の正義に真をおき過ぎて論証しがちな面に対しての懸念、の二点に分け

られる。〈A〉は、統治権的支配権・主従制的支配権の両者より成り立つという藤木説に対して、三鬼氏はそれを認めつつ統治権的支配権の由来解明（領土裁判権と天皇大権のかかりあい）の必要性を説き、今野氏は主従的支配権は惣無事令の結果得られたにすぎないとした。〈B〉は山室氏が政治史解釈に対するスタンスの問題として指摘した。また藤田達生氏は豊臣政権の四国国分けを検討することで、その武力征服の色彩が濃いことを指摘、藤木説の豊臣政権の全国統一の基調Ⅱ惣無事の論理は四国には当てはまらないとみた（「豊臣国分けに関する一考察—四国国分けを中心に—」『日本史研究』三四二、一九九一）。

(4) 一九九〇年十月七日、東北史学会が開催したもので筆者は参加できなかったが、そのときの報告・討論については翌年、『歴史』七六で特集記事として掲載されているのを参照した。

(5) 惣無事の論理に基づき豊臣政権が推し進めてきた東国政策の最終段階として、服属大名の知行割、城割り、妻子上洛等の政策を指す。「関東・奥両国惣無事」令と対象領域として、「東国」として一括しているが、個々の地域的特質を意識する際は「奥羽仕置」・「関東仕置」の語を用いる。

(6) 当該期北関東における個々の戦国大名の動向については、地方自治体史レベルから個別論文まで枚挙に暇がないが、東国国家論の視点から当該地域の歴史的特性を論じた佐藤博信氏の研究は注目される（「戦国期における東国国家論の一視点—古河公方足利氏と後北条氏を中心として—」『歴史学研究』一九七九年度別冊、のち同

編『東国大名の研究』、吉川弘文館、一九八三に所収）。鎌倉府体制以来の北関東豪族層の動向を織豊期まで掘り下げて、その中世的自立性の終焉を描いたものである。また、斉藤司「中近世移行期の関東について―関東地域論の一素材として―」（『地方史研究』二〇三、一九八六）は、天正十八年の関東知行割が、それまでの領主動向といかに連結するものであるかを、やや概括的に述べている。

(7) 皆川家に伝来した文書群は「皆川文書」として、東京大学史料編纂所に影写本が架蔵され、一部は写真帳で見ることができ。また大部分は『栃木県史』史料編中世一（栃木県、一九七三）等に活字化されている。

(8) 『真田家文書』（『信濃史料』十七、信濃史料刊行会、一九六一、一三頁）。このほか、小田原陣の後詰めであった相良頼房（肥後人吉城主）には四月十八日付の豊臣秀吉朱印状において皆川氏に関する同様の内容が（太田家所蔵文書）『新編香川叢書』史料編（二）、香川県教育委員会、一九八一、二三七頁）、去就が注目されていた伊達政宗に対しても豊臣奉行による通達がなされており（天正十八年四月二〇日付良寛院・上郡山仲為（共に政宗の使僧・家臣）宛木村清久・和久宗是連署状、「伊達家文書」一、『大日本古文書』家わけ三、東京帝国大学史料編纂掛、一九〇八、六五二頁）、皆川広照の降服は諸大名への公開性が帯びられていた。

(9) 『群馬県史』通史編三中世（群馬県、一九八九）、七二八頁。

(10) 天正十八年五月二〇日付木村重茲・浅野長吉宛豊臣秀吉朱印状

（『浅野家文書』、『大日本古文書』家わけ二、東京帝大史料編纂掛一九〇六、四六頁）。

(11) 『日葡辞書』でも、「支配する、あるいは統治する」の意の「オサメ」と、「なされる事の最終回」の意としての「オサメ」とを区別して用いている（『邦訳日葡辞書』、岩波書店、一九八〇、七一九頁）。

(12) 『伊達家文書』二（『大日本古文書』家わけ三、東京帝大史料編纂掛、一九〇八）、一三頁。

(13) 『輝元公上洛日記』天正十六年七月二九日条（『加賀藩史料』一、侯爵前田家編輯部、一九二九、三七三頁）。

(14) 天正十一年六月二八日付狩野秀治（上杉景勝の奏者）宛増田長盛書状（『歴代古案』、『大日本史料』十一―四、東京帝大史料編纂所一九三〇、七〇一頁）。

(15) 『邦訳日葡辞書』、五九七頁。

(16) 例えば、元龜二年（一五七二）四月十一日付上杉輝虎宛北条氏政書状中「仍向越中御出馬、神通川を被取越、東西一変二御本意、敵城十余ヶ所被付落居、被納御馬之由」（傍線筆者、「上杉家文書」一、『大日本古文書』家わけ十二、東京帝大史料編纂所、一九三一、五九四頁）。

(17) 「先年」についても、果たして天正十八年からどのくらい遡及するものか判然としないが、『邦訳日葡辞書』では、『Sagimotoxi（先の年）、過ぎ去った年々』（七五一頁）と記され、決して「去年」（天正十七年）ではないことは明らかである。

(18) 最近、原田正記氏は天正十年の東国諸大名の信長への御礼の動きに天下統一の画期をみ、その準備段階として徳川家康を媒介に、東国諸大名へ鷹所望を行っていたこと、鷹を進上させることでその分国を安堵しようとしたことを指摘している(織田政権の到達―天正十年「上様御礼之儀」をめぐって―、『史苑』五一―一、一九九一)。

(19) 栃木氏皆川城内町金剛寺保管(『栃木県史』史料編中世四、栃木県、一九七九、五三四頁)。戦国時代の皆川氏に関する研究は菅谷武一「皆川氏と古河公方」(『下野史学』二一、一九六六)があるが、古河公方への忠誠を礼賛した、後北条氏との軍事抗争史的側面にとどまっている。

(20) 豊田武『苗字の歴史』(中央公論社、一九七一)によると、皆川氏は小山氏(藤原秀郷の子孫として、代々下野の押領使・大介あるいは大掾を世襲)の庶流であり、「皆川」は当て字で、「蜷川」が正しく、分流に常陸の皆川氏がある(九三―九六頁)。

(21) 内閣文庫影印叢刊『譜牒余録』下所収「皆川家譜」(汲古書院、一九七五、一八八頁)。次註の信長主印状の日付が十月二十九日であるので、あるいはその朱印を携えた使者の皆川領到着日をふくめての記載か。

(22) 「皆川文書」(『栃木県史』史料編中世一、一八九頁)。東京大学史料編纂所影写本でも異同なし。

(23) 長谷川成一「鷹・鷹献上と奥羽大名小論」(『本荘市史研究』一、一九八一)。

(24) 右同。長谷川氏は出羽の最上氏を事例に、鷹献上を機として受領名をえたことが、家臣団統制に効を奏したと述べている。

(25) 『新訂寛政重修諸家譜』十四(統群書類従完成会、一九六五)、八三頁。

(26) 『寛永諸家系図伝』八(統群書類従完成会、一九八五)、一〇三頁。『譜牒余録』・『寛政重修諸家譜』と重複する事項は、できるだけ成立の早い当家譜に拠っている。

(27) 『新訂寛政重修諸家譜』十四、八三頁。「十年浜松にいたりはじめて東照宮に拝謁し、五月九日浜松を御首途ありて安土におもむかせたまふ。このとき広照従ひたてまつり。右府に謁す。最初浜松の徳川家康(東照宮)に謁してから、信長(右府)のもとへ連れられている

(28) 「皆川文書」(『栃木県史』史料編中世一、一九三頁)。東大史料編纂所架蔵写真帳でも異同なし。

(29) 『信長公記』天正九年十一月一日条にも同様の記事、「関東下野国蜷川郷、長沼山城守、名馬三ツ進上、根来寺、智積院、蜷川の伯父なり。是れ又、使者同道候て参られ、堀久太郎御取次なり。」とある。(桑田忠親校注『改訂信長公記』、人物往来社、一九六五、三三八頁)。

(30) 摂津の坂東屋富松は室町幕府の政商として、幕府の指令あるいは意向(上洛出仕催促など)を遠国諸家に伝達し、また諸家の意志を幕府すじ(政所)に伝える役割を果たしていた(小林清治「坂東屋富松と奥州大名…補考」、『福大史学』四四、一九八七)。特に

伊達領国内での商業高利貸活動を背景に、伊達氏に対し官途受領の斡旋や、秀吉の上洛催促・上方の政情報告を行っていた(同「坂東屋富松と奥州大名」『福大史学』四〇、一九八五)。また京の田中清六は、奥羽の鷹買で生業を立てると共に、秀吉の信任を得、上方の政情を南部氏に伝え、前田利家との仲介を行っていた(森嘉兵衛『日本僻地の史的研究』上、法政大学出版局、一九七四、一六八頁)。

(31) 『皆川文書』(『栃木県史』史料編中世一、一九〇頁)。東大史料編纂所架蔵影写本でも異同なし。

(32) 当時滝川一益は織田信雄の与力として伊賀攻めを担当していた(『改訂信長公記』九月十一日条、三三四頁)が、あるいは翌年の甲州征伐を想定した、信長の意図があつたのかもしれない。

(33) 『皆川文書』(『群馬県史』資料編七中世三、群馬県、一九八六、八二九頁)、東大史料編纂所架蔵影写本でも異同なし。なぜ「野州蜷川」ではなく「常州蜷川」であるかは明らかにできなかった。前掲註(20) 豊田書によれば、皆川氏の分流が常陸に存在したとされているが、『茨城県史』中世編所収「常陸・北下総戦国時代の勢力図(天正初年)」(茨城県、一九八六、三〇五頁)を参照しても、その所在が判明しなかった。豊田氏のいわれる分流とはあるいは江戸時代初期(皆川広照は元和九年、常陸新治郡に転封)の事象か。

(34) 『皆川文書』(『栃木県史』史料編中世一、一九二頁)。東大史料編纂所架蔵影写真帳でも異同なし。

(35) 前掲註(6) 佐藤論文中、皆川氏の馬献上、「東海道公儀之上」での徳川領国内通過は天正五年(一五七七)とされているが、『譜牒余録』・『寛政重修諸家譜』による記載からやはり天正九年(一五八一)を端緒とみるのが妥当だろう。また佐藤氏は、後北条氏の支配領域が「関八州御分国」というかたちで織田政権から公認されたという『信長公記』天正六年以降の諸事例(進物献上等)を挙げ「④(筆者註、佐藤が分類した伝統的に古河公方足利氏の權威に服する北関東諸豪族、なお⑧は山内上杉氏に服する南関東)地域の伝統的豪族層が個別的に(主従制の媒介を含む)中央権力と結んでいること、また信長の『天下布武』論にもとづく東国介入の途が留保されていた」ことが、後北条氏の領国体制を「信長の天下支配権と複合的構造をなしていた」ものとして位置づけている(七九頁)。皆川氏は佐藤氏の分類するところの④地域に属する。

(36) 『寛永諸家系図伝』八、一〇三頁。

(37) 藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』、五頁。

(38) 『相州文書』(『群馬県史』資料編七中世三、九〇三頁)。

(39) 『寛永諸家系図伝』八、一〇三頁。

(40) 『三浦文書』(『大日本史料』十一一五、東京帝大史料編纂所、一九三四、八三一頁)。東大史料編纂所架蔵影写本でも異同なし。

(41) 『栃木県史』史料編中世四(栃木県、一九七九、二二八頁。このほか、天正十二年説をとっている自治体史として、『群馬県史史料編七中世三(九〇六頁)、『太田市史』史料編中世(太田市、一九

八六、八九三頁）がある。

(42) 『豊臣平和令と戦国社会』、六四頁。

(43) 天正十五年正月十九日付上杉景勝宛天徳寺宝衍（後の佐野房綱）

書状（「上杉家文書」二、「大日本古文書」家わけ十二、東京帝大史料編纂所、一九三五、二〇八頁）中、宝衍は「然者、長新（筆者註、長尾新五郎顯長のこと。）在城足利之地、北条陸奥守為物主、付城致之、昼夜雖無手透候、三四月の比迄、可為堅固之由、被申越候」と述べている。これは館林城を追われ、代りの足利領を、北条陸奥守（氏照、武蔵八王寺城主）が「物主」（年貢課役徴収・軍役動員等広汎な支配権）として、大がかりな支城普請を行っていたことを示している。このような、後北条一族による外様領の要塞化・番城への家臣団配属が深化しつつあった天正十五年（一五八八）に至っても、皆川氏がその「進退」を懸念していたとは考えられない。

(44) 『皆川文書』（『大日本史料』十一一六、東京帝大史料編纂所、一九三六、五〇七頁）・中村孝也『徳川文書の研究』上（日本学術振興会、一九五八、五九七頁）。『栃木県史』史料編中世四（二六六頁）では、『史料3』中「将又其表惣無事、由良・長尾儀付而」とある個所が、「其表惣無事由候、即長尾儀付而」と読まれている（傍線筆者）。東大史料編纂所架蔵影写本により、前者の読みが正しいと判断した。

(45) 文書中、前田利家が「筑前守」と記される初見は天正十四年（一五八六）五月である（岩沢愿彦『前田利家』、吉川弘文館、一九六

六、一二五頁）。また、関白政権の權威が確立した天正十六年の段階で、領主間文書における秀吉を指す文言は主に「関白様」・「関白殿」・「殿下様」・「上様」が通例で、皆川氏と同じく中小豪族の範疇にはいる信濃の小笠原貞慶も、陸奥の田村宗顕宛の書状で「関白様」を用いており（『青山文書』『福島県史』七資料編古代・中世、五八九頁）、「筑州」の用例をさがすのは困難である。

(46) 逆に小牧・長久手合戦直前であれば、皆川氏が、保護者である徳川氏の動静が気になるのが自然で、現に家康はそれに応え、二週間後、上方の戦況報告を皆川氏に送っている（天正十二年三月二五日付「佐竹文書」、『大日本史料』十一一六、三六七頁）。

(47) 奥羽でもこれに似た動きとして、「奥羽自決のみち」として藤木久志氏より紹介されている（『豊臣平和令と戦国社会』、四八〇四九頁）。藤木氏によれば、奥羽の戦国領主は、国という地縁（「国中之儀」、侍という身分の意識（「侍道」）を共通の基礎・規範にして生きており、それらの価値観に基づく領主間連合への動きは豊臣政権の求心化とは明らかに違った秩序であるという。佐藤博信氏も、織田政権以前の関東の状況について、特に北関東において後北条氏に対する明瞭な反後北条戦線として結集し、武力で抵抗していく論理として、「奥羽自決のみち」に匹敵する「味方中」や「一味中」なる人的な結合の論理（「主従制の論理」）を指摘している（前掲註（6）佐藤論文、七九頁）。

(48) 『譜牒余録』（『新編埼玉県史』資料編六中世二古文書二、埼玉県、一九八〇、五七五頁）。

(49) 前掲註(19)の『皆川系図』によると、皆川氏と水谷氏は姻戚関係

(皆川広照の生母が水谷正村の息女)にある。水谷氏は結城氏の軍事指揮下に属し、織田政権末期使僧を介して徳川氏に好を通じた時、家康の関東出馬を請い、結城氏を旗頭として家康に従軍することを約束した(『新訂寛政重修諸家譜』十四、一二〇頁)。

(50) 井伊直政覚書(『略』一、さたけ・ゆふきるひきやく御通可被成之事、一、みなかわ方・水之や兩人御通候て可給候事(後略))
(皆川広照) (水谷正村)

「誤文書」『新編埼玉県史』資料編六中世二古文書二、埼玉県、一九八〇、五七五頁。徳川側より提案された和睦の条件であり、文末に後北条方の了承した旨が記されている。

(51) 藤木久志氏が戦国期の国分の史的意義について、それが当事者を拘束してかなり安定した効力を持っていたことを指摘しているように(『豊臣平和令と戦国社会』、十一頁)、徳川氏が後北条氏の上野領有に干渉しない論理が優先された。

(52) 「福島於菟吉氏所蔵文書」(太田氏宛)、「常総遺文」(多賀谷氏宛)、「佐竹文書」(結城氏宛) (『大日本史料』十一四、東京帝大史料編纂所、一九三一、七八一〜七九〇頁)。

(53) 「武徳編年集成」(『第日本史料』十一一五、二〇二頁)。

(54) 天正十一年四月廿八日付佐々成政宛羽柴秀吉書状(佐佐木信綱氏所蔵文書) (『大日本史料』十一四、四一頁)。

(55) 同年六月十七日付で佐々成政が越後の新発田重家に宛てた書状中
(織田信孝) (信長)
「然者伊勢之国司二御すハリ候御息様、上様御時不相替天下被成御存知候、羽柴筑前方万端御指南申儀候、(中略)其御国上様御朱印

之旨候条」と認識している(『石川孫四郎氏所蔵文書』『大日本史料』十一一四、六七九頁)。

(56) 同前。(57) 前掲註(53)。

(58) 織田権力が東国にまで及んだ段階で、それまでの東国の自立的完結性を前提とした後北条氏の支配体制(公方―管領体制…古河公方を「御一家」として位置づけ、関東諸大名への対外機能を吸収し、自らの領国の公儀化を促進する)は、信長の天下支配権と複合的構造をなす「関八州国家体制」として位置づけられる(前掲註(6)佐藤論文)。具体的には、織田分国の戦後処理の過程で家康との領土分割定の際にも、甲信二国を放棄してでも上野一国を確保し、北関東諸領主に対する物理的強制力を行使するということである。

(59) 影山幹男「戦国期における北関東国人層の動向―下野佐野氏を中心として―」(『史翰』八、一九七二)。

(60) 「上杉家文書」二、一八八頁。

(61) 「新訂寛政重修諸家譜」十四、八三頁。

(62) 天正十四年五月十九日付芹沢国幹宛大掾清幹書状(『芹沢文書』「益子町史」二・中、中世資料編、益子町、一九八五、五六七頁)中、「仍西表之様子、皆川山城守南へ一和」とある。

(63) 「新訂寛政重修諸家譜」十四。中御門宣綱は従二位権中納言として、永祿元年(一五五八)より駿河に下向、遠江移住後かの地で没した(「公卿補任」「諸家伝」、『大日本史料』十一二、永祿十二年四月是月条、東大史料編纂所、一九三〇、四七〇〜四七二

頁)。

- (64) 最近、立花京子氏は藤木氏によって天正十五年暮に比定されていた「関東・奥両国惣無事」令令書(伊達氏宛て)を、史料用語の問題や当該期の伊達氏の行動から、天正十四年暮のものとする新解釈を示している(『片倉小十郎充て秀吉直書の年代比定』、『戦国史研究』二二、一九九一)。もし立花氏のいわれる如く、すでに天正十四年暮に秀吉の関東停戦令が家康に取り次がれ、皆川氏に傳達されていたとすれば前掲『寛政重修諸家譜』で皆川氏が後北条氏との戦闘行為を「其台命にしたがはむと欲つすといへども、氏政襲ひ来るにより、やむことを得ずとしてかれと戦ひをまじふ。あへて我心にあらざるりと」(八、八三頁)と家康に弁明した天正十四年の記事と整合する。

- (65) 当該期の取次制度の研究は、山本博文「家康の『公儀』占拠への一視点―幕藩制成立期の『取次』の特質について―」(『歴史学研究』五三〇、一九八四、後同書『幕藩制の成立と近世の国制』、校倉書房、一九九〇に所収)に詳しい。

- (66) 前掲註(52)。

- (67) 『豊臣平和令と戦国社会』、四四頁。

- (68) 上杉氏の前関東管領としての「筋目」よりは現実性のある徳川氏の「御威光」を利用した方が豊臣政権にとって、諸大名との主従制形成に有効であっただろう。

- (69) 豊臣政権が小田原攻略のために作成したと思われる「関東八州諸城覚書」では皆川氏は千騎を動員し、皆川・栃木・富田・南摩の

四城を守っていたことがわかる(『毛利家文書』四『大日本古文書』家わけ八、東京帝大史料編纂部、一九二四、五〇四頁)。

- (70) 市村高男「関東における徳川領国の形成と上野支配の特質」(『群馬県史研究』三〇、一九八九、五四二頁)。

- (71) 「秋田藩採集文書」(『鷲宮町史』史料三、中世、鷲宮役場、一九八二、五四二頁)。

- (72) 津軽為信(陸奥大浦城主)は当時南部姓で南部信直(陸奥三戸城主)の被官であったが、東国仕置の直前南部氏から自立し、それが私戦禁止を旨とする豊臣の惣無事令に触れた。為信はこれに対処すべく、天正十七年(一五八九)暮、鷹献上を通じて豊臣政権との接触到成功し、為信に対する政権の支持基盤が固められたことが、翌年の奥羽仕置にあつて首尾よく領地没収の危機を回避し得た要因であったという(長谷川成一「天正十八年の奥羽仕置と北奥・蝦夷島(同編『北奥地域史の研究』、名著出版、一九八八、九〜十頁)。

- (73) 陸奥の豪族石川義宗は小田原参陣が果せなかったにもかかわらず、石田三成・長谷川秀一の判断によって、もし人質を差し出し、上洛するならば、知行安堵の道は残されていたが、結局葛西・大崎一揆に巻き込まれ、改易されるに至つた(今野真「いわゆる『奥羽仕置』の一断面―二通の豊臣秀吉朱印状を中心に―」(『仙台電波工業高等専門学校研究紀要』十八、一九八八、一四五頁)。

- (74) 天正十八年五月二日付片倉重綱・原田宗時宛河島重統書状「下野国ノ侍皆川山城守走出申候、人数百計召連候、其外北条左衛門大

夫命を被助候様ニと申上、無理ニ罷出候、左衛門大夫ハ玉繩と申城ニ籠申つる」(『伊達家文書』一、六五九頁)。

- (75) 「諸將感状下知状并諸士状写」(『新編埼玉県史』資料編六中世二古文書二、七八三頁)。

- (76) 「忍城戦記所収文書」(『新編埼玉県史』資料編六、七八八頁)

- (77) 「別本佐野軍記」によれば、宝衍は秀吉家中の鍵の師匠として、秀吉とも親密な間柄であった(『大日本史料』十一—十三、東大出版会、二四頁)。宝衍は佐野領を回復した後隠居し、養子佐野信吉(秀吉側近富田知信の子)が、宝衍の家督を継いだ。このことについては、秀吉の息がかかった家臣を、徳川新領国の外縁部へ配置する、豊臣政権の政治的意図とみる市村高男氏の見解「前掲註(70)論文」がある。

- (78) 「富岡家古文書」(富岡氏)、「金谷文書」(由良氏)。ともに『群馬県史』資料編七所収(一〇四〇、一〇四二頁)。

- (79) 前掲註(74)。ここでいう、「惣奉行」とは、単に秀吉の上意下達のみならず、小田原遅参の諸大名を秀吉にとりなし、身柄を保証できるだけの政治力があつたことを示している。

(学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程)